

古典教材の授業づくり ―『平家物語』扇の的をめぐって―

鈴 木 恵

一、はじめに

筆者は、前稿「古典教材の授業づくり―『おくのほそ道』平泉・光堂の句をめぐって―」において、新しい授業づくりを提案するのに先立ち、現行学習指導要領の分析を行って、次の諸点に留意すべきことを指摘した¹⁾。

- (1) 平成二十年版学習指導要領における、特記すべき最大の改訂は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の新設である。
- (2) これを新設した意義は、「今回の改訂では、伝統的な言語文化に小学校の低学年から触れ、中学校においても引き続き古典に親しむ態度の育成を重視している」(中学校学習指導要領)とされているように、小中学校を通して児童・生徒の「古典に親しむ態度」を「育成」することにある。
- (3) 学習指導要領においては、まず小学校段階において古典に関する基礎的・基本的内容を学習し、しかる後に中学校において「古典の世界に触れること」(一学年)、「古典の世界を楽しむこと」(二学年)と進み、最終的に「(古典の)世界に親しむこと」(三学年)ができるように、段階を踏んで、系統的に学習できるように設計されている。
- (4) 学習指導要領には、「古典の世界に親しむこと」として六項目の内容が明示されているが、このうち「古典に表れたものの方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」が最も重要な項目

である。それは、小学校の高学年にも「昔の人のものの方や感じ方を知る」という項目が設定されていて、そこに小中学校を貫く一貫した方向性が見出されるからである。

(5) 要は、「古典の世界」にどっぷりと浸かり込んで、極力その時代、その地域に生活する人になり切って物事を考えることである。不用意に現代に引きつけた解釈をしないことや、無理矢理に現代との共通項を探ろうとしないことが切に求められる。

また、半田淳子「学習指導要領の改訂と小中学校の国語教科書が抱える課題」によって、中学校の古典教材には、定番と言われるものが多数存在するとの知見を得た²⁾。『竹取物語』『平家物語』『枕草子』『徒然草』『おくのほそ道』『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』『論語』等のことであるが、詳細に見ると、学校図書、教育出版、三省堂、東京書籍、光村図書の各社に共通する教材が、中学校の各学年毎に用意されていることがわかった。第一学年の『竹取物語』、第二学年の『平家物語』(『枕草子』も学校図書以外は採録している)、第三学年の『おくのほそ道』である。これらは正に、定番中の定番と言いうことができる。

前稿では、このうち『おくのほそ道』の「平泉・光堂の句」を取り上げたが、本稿ではそれに続いて、『平家物語』の「扇の的」について分析・検討を行い、新しい授業づくりを提案してみたい。

なお、本稿の姉妹編として、『平家物語』の「敦盛の最後」を取り上げ

た別稿を用意している⁽³⁾。しかし、何れも『平家物語』を取り扱い、なおかつ何れが先に公にされるか不確かであるため、本稿と別稿には内容的に共通点が多いこと(特に第一〜四節、第八節)を、あらかじめお断りしておく。

二、『平家物語』授業づくりの前提条件

『平家物語』の授業づくりの前提として、授業者側が承知しておかねばならないことが多々ある。次下にそのいくつかを掲げる⁽⁴⁾。このすべてを児童・生徒に伝える必要はないが、授業者側の、言わば必要条件だと考えている。

1. 舞台はどのような時代か

・教科書の記述は、院政時代末期の寿永二年(1183)―三年(1184)の頃。

・天皇家、藤原摂関家、武家(平氏・源氏)が真っ二つに分かれて戦った保元・平治の乱の後、武家政権を樹立した平氏であったが、次第にその専横ぶりに対する批判が高まり、ついに治承四年(1180)四月、後白河法皇の第三皇子・以仁王が「平家追討」の令旨を出すに至った。以仁王自身も挙兵し、源頼政(所謂「源三位頼政」、摂津源氏。ちなみに頼朝たちは河内源氏)と連動して平家と戦ったが、三井寺園城寺から南都の興福寺に逃れる途中で平家軍に討たれた。しかし、以仁王の令旨は伊豆・蛭が島に流されていた源頼朝や、木曾義仲に源行家(義朝の弟)を介して伝えられ、それぞれの挙兵につながって行く。

・「扇的」は、屋島の戦いで、頼朝の弟・義経に背後から急襲された平家軍が総崩れとなり、海上に逃れた後、海上の平家と陸上の源氏とが対峙している場面。日暮れて互いに引き退く頃合い、(平家方と覚しき)一艘の小舟が岸近くに来て、紅地に日の丸を描いた扇を竿の先に付け、これを射よとばかりに手招きする。源氏方では射手に那須与一を指名する。

・この名場面は、後に能「屋島」や幸若舞「敦盛」、歌舞伎「那須与一 西海硯」などの題材となり、むしろそちらの方からの尾ひれ羽ひれがついて伝わっている。歴史的事実ではなく、フィクション。

2. 那須与一(余一)とはどのような人か

・生没年不詳。鎌倉時代前期の武士。与一は通称で、下野国の豪族・那須資隆(資高)の十一番目の子とされ、余一(十余りの意味)とも書く。文治元年(1185)二月、義経に従って屋島の戦いに加わった与一が、平家方の小舟に立てた扇的を一矢でみごとに射落として、敵味方の賞讃を博した話は、『平家物語』巻第十一や『源平盛衰記』に名場面として描かれている。この時与一は『平家物語』では二十歳ぐらい、『那須系図』では十七歳とされている。確かな資料には見えず物語上の人物としての色彩が極めて濃い。

3. 後藤実基や伊勢義盛とはどのような人か

・後藤実基は義経の信頼が厚く、平家方の扇的の意図を推量し、射手として那須与一を推薦したとされているが、推薦者に関しては諸説があつて、実基の行動とは断定できない。実基は、すでに保元の乱の頃から義経の父・義朝配下の武将としてその名が見える。「古兵」として、その体験や軍語りを伝えていたとも考えられ、伝承者としての側面にも注意される。

・伊勢義盛は義経腹心の郎党で、屋島の合戦に際しても義経とともに屋島の内裏へと進撃し、海上に逃れた平家軍と対戦した。物語世界における義盛は義経の命を至上とし、それを実現させるのに躊躇するところのない、股肱の郎党としての造型がなされている。

三、『平家物語』の伝本

ところで、『平家物語』には語り本系統と読み本系統という二つの系統がある。語り本系統はさらに八坂流系(城方)と一方流系とに分けられる。八坂流系の諸本は平家四代の滅亡で終わるが、一方流系の諸本は「灌頂巻」が付加されているという特徴がある。語り本系統は、当道座に属する盲目

の琵琶法師によって琵琶を弾きながら語られたもので、読み本系統は、従来は、琵琶法師によって広められた語り本系統を、読み物とするために加筆されたものと解釈されていたが、近年は読み本系統の方が語り本系統よりも古態を存するのではないかと、という見解が有力となってきた。

語り本系統の一方流には、盲目の平家琵琶奏者・明石寛一が応安四年（1371）にまとめた所謂、覚一本があり、これが現在『平家物語』のスタンダードとなっている。ただ、その原本は現存しないため、一般には東京大学文学部国語研究室所蔵の所謂、高野本、あるいは龍谷大学大宮図書館所蔵本によっている^⑤。八坂流では国立国会図書館所蔵の百二十句本がよく知られている^⑥。一方の読み本系統には、延慶本、長門本、源平盛衰記などの諸本があるが、前述のように、このうち延慶二、三年（1309-110）の本奥書を有し、鎌倉時代語の使用が指摘されている延慶本が注目されている^⑦。

四、教科書教材の出版

現行の教科書教材の『平家物語』は、「敦盛の最後」を掲載する教育出版、三省堂が『新編日本古典文学全集』（小学館）、学校図書が『日本古典文学全集』（小学館）を出版とし、「扇的」を掲載する東京書籍、光村図書が『新編日本古典文学全集』（小学館）を出版としているように、『新編日本古典文学全集』（小学館）によるものが多い。

『日本古典文学全集』『新編日本古典文学全集』の底本は、ともに高野本であるので、教科書教材には、語り本系統・一方流の覚一本系のみが採録され続けており、読み本系統が選ばれたことは全くないことがわかる。ちなみに、『新潮日本古典集成』は、八坂流系の百二十句本を底本としている。

教科書教材の『平家物語』では、必ずまず有名な冒頭文「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」を掲げ、この物語の中心

思想と、平家の栄華と滅亡とをからめて解説した後、「敦盛の最後」ないしは「扇的」に入って行くように設計されている^⑧。

五、「扇的」の本文

ここでは、所謂「扇的」を掲載する東京書籍、光村図書の教科書を取り上げる。ことさらに所謂としたのは、厳密には「扇的」と明示するのは光村図書だけで、東京書籍には見出しがないからである。

前節に述べたように、何れの本文も語り本系統の覚一本系、高野本が底本であった。しかし、実は高野本には「扇的」の段はなく、「那須与一」という章段名が付いている^⑨。

高野本の冒頭部分は、「さる程に、阿波、讃岐に平家をそむいて源氏を待ちける物ども、あそこの峯、この洞より十四五騎、二十騎、うちつれうちつれまいりければ、判官ほどなく三百餘騎にぞなりにける。」（阿波、讃岐で平家に背いて源氏を待っていた者どもが続々と集まってきたので、判官・源義経の勢力は三百餘騎までになった）という場面である。この後日暮れとなったので、源平両軍が退却を始めると、「おきの方より尋常にかざ（つ）たる少舟一艘、みぎはへむいてこぎよせけり。」（平家方と思しき小舟が一艘、汀に向かって漕ぎ寄せてくる）という場面となる。

末尾部分は、那須与一が見事に扇の要部分を弓で射切った場面に続いて、「夕日のか、やいたるに、みな紅の扇の日いだしたるが、しら浪のうへにたゞよひ、うきぬしずみぬゆられければ、奥に平家、ふなばたをた、いて感じたり。陸に八源氏、えびらをた、いてとよめきけり。」とあるように、与一の弓の腕前があまりに見事なので、敵も味方も感動し、やんやの喝采を送る場面で終わっている（後掲の『平家物語』扇的―高野本・延慶本対照表―参照）。これは覚一本系の伝本である龍谷大学大宮図書館所蔵本や、市立米沢図書館所蔵本でも同様であるので、このパターンは覚一本系的一般であったようである^⑩。

ところが、教科書教材「扇的」における冒頭部分と末尾部分は次のようになっている（古文による本文）。

・東京書籍

〔冒頭〕頃は二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、折節北風激しくて、礮打つ波も高かりけり。舟は揺り上げ揺りすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。――〔末尾〕平家の方には音もせず。源氏の方には、また飯をたたいてどよめきけり。「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、「情けなし。」と言ふ者もあり。

・光村図書

〔冒頭〕ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、をりふし北風激しくて、礮打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ揺りすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。――〔末尾〕平家の方には音もせず、源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、「情けなし。」と言ふ者もあり。

右に明らかかなように、(後述する光村図書の最末尾部分を除けば)東京書籍と光村図書の冒頭部分・末尾部分は全く同一である(表記はやや異なる)ことがわかる。が、それと同時に高野本における「那須与一」の段の冒頭部分・末尾部分とは、かなりのズレがあることもわかる。すなわち、教科書教材における「扇的」の段は、高野本で言えば、「那須与一」の段にて、源氏側の射手が那須与一に決定し、いよいよ彼が扇を射ようとしている場面から始まって、次の「弓流」の段に入り、与一の弓の腕前に感動して舞いを始めた平家方の老武者を、与一が非情にも射落としてしまう場面までを採録しているのである(詳細は後述)。

「那須与一」の段と「弓流」の段の冒頭は、話としては確かにつながっている。教科書教材の段の名称が、「那須与一」でも「弓流」でもなく、「扇的」としてまとめられているのはそのためかもしれない。

この点、東京書籍は、「那須与一」の一節はこれで終わり、次の「弓流」に入ると(以下略、筆者)という説明を加えた上で、「弓流」の当該部分を掲載している。また光村図書においては、平家方の老武者が射落とされ

る場面までを掲載した上で、「この後、義経の逸話としてよく知られた弓流しの場面が続く。」として、「弓流」の最末尾部分(次掲)を掲載している①。この部分こそが、源義経が武将としての心構えを述べたところで、「弓流」の段のキモである。

〔最末尾〕「弓の惜しさに取らばこそ。義経が弓といはば、二人しても張り、もしは三人しても張り、叔父の為朝が弓のやうならば、わざとも落として取らずべし。厄弱たる弓を敵の取り持つて、『これこそ源氏の大將九郎義経が弓よ。』とて、嘲哂せんぶるが口惜しければ、命にかへて取るぞかし。」と、宣へば、みな人これを感じける。

何れにしても、東京書籍と光村図書の教科書教材の中心は、高野本の「那須与一」の段の中盤から始まり、「弓流」の段の冒頭までの部分であつて、弓の達人・那須与一が共通の主人公となっている。

六、「学習の手引き」の内容

それでは、それぞれの教科書においては、この教材をどのように取り扱っているのだろうか。所謂「学習の手引き」に着目し、その内容を分析・検討してみたい。東京書籍では「課題」、光村図書では「学習」と呼称されている。以下、該当部分を示す。

・東京書籍「課題」

〔読み取る〕

- ① 表現の特徴に注意して、「那須与一」を繰り返し朗読してみよう。
- ② 海に乗り出した「与一」は、どのような状況に置かれ、それによってどんな気持ちになっていただろうか。本文中の言葉を手がかりにして話し合ってみよう。

〔考えを深める〕

- ① 当時の武士の生き方とは、どのようなものだったのだろうか。「那須与一」「弓流」から読み取り、考えたことを文章に書いてみよう。

・光村図書「学習」

① 確認しよう

「平家物語」冒頭部分や、「扇的」の原文を繰り返し朗読し、古典の文章独特の調子や響きを楽しもう。

② 読みを深めよう

場面の状況と、その場に置かれた登場人物の心情について考えよう。

① みぎわへ向かって馬を歩ませる「那須与一」を見送る源氏の武士たちや、「義経」の思いはどのようなものだったろう。

② 扇的を射るために海に馬を乗り入れた「那須与一」の気持ちが表現されている部分を原文から抜き出そう。

③ 最後の場面で、「あ、射たり。」と言った人と、「情けなし。」と言った人の気持ちについて話し合ってみよう。

③ 自分の考えをもとう

「扇的」には、「那須与一」の他に、戦いの最中にありながら舞を舞う「黒革おどしの鎧の男」や、敵に囲まれた状況の中で、自分の弓を命がけで拾い上げる「義経」の姿など、さまざまな人物のすがたが描かれている。このような登場人物たちの行動から、「平家物語」に描かれたものの見方や考え方について、自分の考えを述べてみよう。

「次へつなげよう」

□ 古典の文章を朗読して表現になれ、作品を読み味わったか。

□ 人物の心情を想像して読み、古典のものの見方や考え方に触れたか。

義経や源平の武士たちの行動や心情を問う設問も一部に見受けられるが、やはり那須与一がクロスアップされていて、とりわけ「扇的」を射るために海に乗り入れた時の与一の心情に、重点が置かれているように思われる。ところが、与一は、前述のように「扇的」を射た後に平家方の老武者をも射落としているのであるから、都合二度弓を射たことになる。しかも、「扇的」を射た時の与一はあれこれと思悩むのであるが、老武者を射た時の与一は、まるで別人であるかのように、一切躊躇することなく、情に流されることもなく弓を射るのである。この重要なポイントについて掘り下げる設問は、「学習の手引き」には見当たらない。

しかし、昨年燕市立分水中学校にて参観させていただいた、水戸志津子教諭による研究授業では、「平家の武者に弓を射る場面での与一の心情を考えよう。」という学習課題を設定し、「平家の武者を射る時に、与一に迷いはなかったのか?」「与一はこの場面で迷わずに弓を射たのだろうか?」などの働きかけを行って、自分の考えをまとめさせていた¹⁰。まさに生徒たちは、「扇的」を射る際には大いに逡巡していた与一が、老武者を射る時には何の躊躇もないかの如く行動したことに疑問を持ち、二つの与一像の違いについてその理由を導き出そうとしたのである。このことから、中学校の現場においては、「学習の手引き」を越えて、那須与一を中心とした当時の武士たちの行動やその心情に、より深く迫ろうとする取り組みが積み重ねられていることを知った。

ただ同時に、現行の『平家物語』の「扇的」の教材では、それはなかなか難しいのではないかと懸念を抱いた。

七、古写本における「扇的」

そこで、『平家物語』の「扇的」（実際には「那須与一」「弓流」の段）の本文について、改めて検討してみる必要がある。その手立てとしては、『平家物語』の古写本を使うのが最も有効のように思われる。ここでは、語り本系統の中から覚一本系の高野本、読み本系統からは、古態を存するものとして注目されている延慶本を選定し、両本文を逐一比較・検討してみた¹¹。

その結果は、後掲の「『平家物語』扇的―高野本・延慶本対照表―」に示したとおりである。上段に高野本、下段に延慶本を配置し、それぞれに筋立て（全部で十四場面）を示した。表を一瞥してわかるように、実は教科書教材の「扇的」は、高野本の「那須与一」の段の、全体の三分の二ほどの部分から始まっていて、そのまま「弓流」の段の冒頭部分へと続いているのである。また一方、延慶本ではそれらは「余一助高扇射事」の段としてまとめられており、次段は「盛次与能盛詞戦事」となっている。

そこで、教科書への採録の有無を明示するために、便宜的に境界に破線

を引き、採録されていない部分（破線より前）の筋立てには、丸囲みのアルファベット記号①～⑥（六場面）を付し、採録されている部分（破線より後）の筋立てには、丸数字①～⑧（八場面）を付した。高野本と延慶本とで大略同内容の本文である場合は同じ記号とし、それが見当たらない場合は「この部分なし」と表示した。

それによると、高野本にあって延慶本にないものは④⑤⑥の三場面、延慶本にあって高野本にないものは③の一場面であるように、独自場面は合計しても四つに過ぎなかった。全部で九つの独自場面が存した「敦盛の最後」に比べて、相違は半分以下であった¹⁴⁾。

とは言え、教科書に採録されていない部分では、高野本の方が詳細で言語量も多いが、採録されている部分では、逆に延慶本の方が詳細で言語量も多いという傾向が看取された。いま独自場面を中心に、若干の分析を行ってみたい。

①の場面では、平家方と思しき小舟が一艘、汀に向かつて漕ぎ寄せてくる場面に至る、前提条件が示される。源平両軍が対峙する中で、「扇の的」事件が起こるのである。この場面は延慶本にはない。

②は共通場面であるが、高野本では小舟の中から差し出されたのは、紅地に日の丸を描いた扇であるが、延慶本では月を描いた扇となっている。

③は、「扇の的」を掲げた平家方の意図を、義経が後藤実基に尋ねる場面である。

④は、射手として選ばれた与一について、年齢や当日の出で立ちなどを説明している場面である。何れも延慶本にはない。

⑤は、義経から「扇の的」の真ん中を射抜くように命令された与一が、射損ずるかもしれないと一旦は断るのであるが、義経の逆鱗に触れ、致し方なく応諾する場面である。延慶本では、余一（与一）は全く辞退することなく、即座に承知したことになる。

①は延慶本の独自場面である。しかし、この中の「息ノ船ニハ主上建礼門院ヲ始奉テ、二位殿、北政所、月卿雲客、屋形ヲ並ベテ、目ヲスマシテ是ヲミル。汀ノ源氏ハ九郎大夫判官ヲ初トシテ、東国北国ノ大名小名、小馬ヲ静メ、肩ヲ並テ見物ス。彼ヲ見、此ヲ案ズルニ、何モ晴ナラズト云事

ナシ。」の部分は、高野本の①の末尾「おきには平家、舟を一面にならべて見物す。陸にハ源氏、くつばみをならべて是をみる。いづれもく、晴ならずといふ事ぞなき。」と照応しているとも見られる。

このように高野本と延慶本は、同じ『平家物語』であっても、表現の仕方や叙述内容に、かなりの相違が看取されるのである。

そこで、これまで教科書には全く取り上げられることがなかった延慶本と、高野本における「那須与一」の前半部分を取り上げて、詳細に比較・検討を行ってみたいところ、いくつかの疑問点に解を見出すことができた。以下、視点を絞って考察してみたい。

1. 冷酷・非情さが際立ちすぎる与一（高野本）

高野本では、⑥⑦⑧の場面（「弓流」の冒頭）において、「伊勢三郎義盛、与一がうしろへあゆませよ（つ）て、「御定ぞ、つかまつれ」といひければ、今度はなかがざしと（つ）てうちくはせ、よ（つ）ひいてしや（つ）くびの骨をひやうふつとゐて、ふなぞこへさかさまにゐたをす。」とある如く、義経の腹心・伊勢義盛が後から与一に歩み寄り、義経の命を伝えると、与一は情け容赦なく、即座に老武者を射落としたことになっている。このことは前述したところが延慶本では「源氏ノ方ヨリ是ヲミテ、「アレハ射ヨ」と云ケルニ、或又、「若射ハツイツル物ナラバ、先ニ扇ヲ射タリツル事モ気味有マジ。ナイソ」ト云者モアリ。「只トク射ヨ」ト云者モアリ。余一「射」ト云時ニハ矢ヲサシハゲ、「ナ射ソ」ト云ヤリハ矢ヲサシハツシケルホドニ、「ナイソ」ト云者ハ少ク、「只射ヨ」ト云者ハ多リケレバ」（すると、源氏方からこれを見て、「あれを射よ」と言ったのだが、「もし射外したら、先ほど扇を射たことも意味がなくなってしまう。射るな」という者もいたし、「早く射よ」という者もいた。余一は「射よ」と言う時は矢をつがえ、「射るな」と言う時は矢を外していたが、だんだん「射るな」という者は少なくなり、「射よ」という者が多くなってきたので」とあって、周囲のいろいろな声に右往左往し、矢を番えたり外したりする余一（与一）の様子が描かれている。

2. 冷酷・非情さの裏にある理由

ところが、最初の「扇の的」を射る件においては、延慶本には、「判官

「アノ扇仕レ」ト宣ケレバ、資高辞ルニ不及、「承候ヌ」トテ、渚ノ方へゾ歩セケル」(㉑の場面)とあるように、余一(与一)は逡巡することなく、即座に命令に従った様子が描かれている。これに対して、前述したように、高野本ではかなりの紆余曲折があったことになっている。

すなわち、

○「いかに崇高、あの扇の真ん中を射てみる」と言われた与一は、「射おおせる(中略)みかたの兵共うしろをはるかに見をく(つ)て、「このわかもの一定つかまつり候ぬと覚候」と申ければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。(㉒の場面)」

義経から、「あの扇の真ん中を射てみる」と言われた与一は、「射おおせるかどうかは不定です。もし射損じたら御方のキズになります。絶対に射ることが出来る人に仰せつけた方がよいでしょう」と一旦は断るのであるが、義経は怒って、「オレの命令に背くな。それがわからない者はさっさと帰ってしまえ」と言うので、これ以上は拒めないと覚悟した与一は、「外れるかどうかはわかりませんが、ご命令なのでやってみましょう」ということで、致し方なく覚悟を決めたことになっている。

ここに至って、教科書に採録された高野本の⑥(㉑)の場面において、伊勢義盛の言(義経の命)によって、直ちに躊躇なく平家方の(舞っていた)老武者を射落とした与一の行動が、明瞭に理解できてくるのである。すなわち、直前にあった義経とのやり取りによって、与一は義経の命にもはや逆らえない状況に置かれていたのである(㉒)。このことは、引いては源平武士団の、質的な相違にも直結する内容である。とすれば、採録されなかった(A)㉑の場面(とりわけ㉒の場面)の記述内容を押さええない限り、射手として二度弓を射た那須与一の、その時その時の心情をくみ取ることは極めて難しく、当然源平武士団の質的な違いを読み取ることも困難であることがわかるのである。

八、むすび

筆者は、すでに述べたように、古典教材の授業づくりに、当該古典作品の伝本を活用することを提案するものである。

周知のように、古典作品は紙に筆と墨で文字を書いたものであるから、そこには書写者の個性やその人物が生きた時代の文化が投影されている。にもかかわらず、私たちは教科書の活字によるテキストを、当該古典作品の唯一の形と勘違いしている。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された今だからこそ、常々古典作品を取り扱っている身としては、なおのこと残念な状況だと思っていた。

そこで、古典作品の伝本を利用し始めたところ、上述の如く、教科書教材だけでは気づき得ない、様々な事実を再発見し、作品の理解を深めることができた。

本稿で詳述したように、『平家物語』における語り本系統の高野本と読み本系統の延慶本とは、表現の仕方や叙述内容に大きな違いが看取された。ところが、教科書には高野本が採録されるのみで、延慶本が採られたことは全くない。今回この延慶本を比較本文とすることによって、『平家物語』は一つに定まっていけないという事実がわかっただけでなく、教科書の本文とは異なる筋立てがあることを知ったはずである。那須与一が二度弓を射た、それぞれの時点の心情が大いに異なっていたことも理解できたはずである。

繰り返す言うが、古典作品の本文は大抵一つではない。旧態依然とした従来の授業づくりや教科書作りは、もはや要をなさないということに一刻も早く気づくべきである。作品理解の幅が広がれば、必然的に授業の幅が拡がり、さらには興行きが生まれる。そのような授業の中でこそ、「古典の世界に触れ」、「古典の世界を楽しみ」、「古典の世界に親しむ」ことができるのである。

〔注〕

- (1) 拙稿「古典教材の授業づくり―『おくのほそ道』平泉・光堂の句をめぐって―」(『ことばとくら』第27号、二〇一五年一〇月)。
 (2) 「教育研究」55号(国際基督教大学教育研究所、二〇一三年三月)。
 (3) 拙稿「古典教材の授業づくり―『平家物語』敦盛の最後をめぐって―」(『新大國語』第39号、掲載予定)。
 (4) 以下は、『日本古典文学大系 平家物語 上下』(岩波書店)、『新日本古典文学大系 平家物語 上下』(岩波書店)、『日本古典文学全集 平家物語 一二』(小学館)、『新編日本古典文学全集 平家物語 ①②』(小学館)、『新潮日本古典集成 平家物語 上中下』(新潮社)、『後掲の注(5)』(7)の複製本解題『平家物語大事典』(東京書籍)、『平安時代史事典 本編・上下』同 資料索引編(角川書店)、『国史大辞典』(吉川弘文館)等の辞書類によった。
 (5) 東京大学国語研究室所蔵・高野本―『高野本平家物語 東京大学国語研究室蔵 一〜一二』(笠間書院、一九七三年)、龍谷大学大宮図書館所蔵本―『龍谷大学善本叢書 平家物語 一〜四』(思文閣出版、一九九三年)。
 (6) 国立国会図書館所蔵・百二十句本―『平家物語 百二十句本 一〜六』(古典文庫、一九六八)。
 (7) 大東急記念文庫所蔵・延慶本―『延慶本平家物語 一〜六』(汲古書院、一九八三年)。
 (8) 三省堂の教科書のみ、なぜか「おごれる人も久しからず」以下の文言が採られていない。
 (9) 注(5)に掲げた龍谷大学大宮図書館所蔵本には章段名がない。市立米沢図書館所蔵本では「那須与一扇」「弓流」となっている。
 (10) 市立米沢図書館所蔵本―市立米沢図書館デジタルライブラリー、二〇一五年九月一〇日アクセス。
 (11) 平家方の老武者が射落とされる場面は、すでに「弓流」の段に入っている。厳密に言えば光村図書の説明は正しくない。

(12) 二〇一五年一二月八日に開催された、平成二七年度・第九回燕市中学校国語担当者会議(新潟大学教育学部パートナーシップ事業)の一環として行われた研究授業である。分水中学校の二年三組で実施された。

(13) 注(5) 高野本、注(7) 延慶本の本文によった。

(14) 注(3) 拙稿に詳しい。

(15) 但し、東京書籍・光村図書ともに、当該本文の要約を付してある。これによって話の流れは把握できるようになっているが、古文による本文ではないために、重要な箇所として認識されにくい。

〔付記〕

本稿は、注(12)に示した平成二七年度・第九回燕市中学校国語担当者会議(新潟大学教育学部パートナーシップ事業、二〇一五年一月八日、分水中学校)において行った講義内容に基づくものである。九月一八日の第六回(燕北中学校)における『平家物語』の「敦盛の最後」に続いて、同じく『平家物語』の「扇の的」を取り上げ、諸本の比較を活用した授業づくりの提案を行った。

現在小中学校の教科書の改訂時期に当たって、本年度は小学校、次年度は中学校の教科書が全面改定される。本稿は、すべて現在使用されている改訂前の教科書によっている。

(二〇一六年三月二五日成稿)

〔追記〕その後、改訂版の教科書にて確認作業を行った。

まず、唯一『日本古典文学全集』(小学館)を出典としていた学校図書もまた『新編日本古典文学全集』(小学館)に変更となり、全教科書が『新編』で統一されたが、何れの底本も高野本であるので、本稿の趣旨には全く影響しない。教科書教材の採録部分も全く同じであった。なお、「祇園精舎の鐘の声」から「ひとへに風の前の塵に同じ」に及ぶ冒頭文については、旧版ではなぜか三省堂のみ「おごれる人も久しからず」以下の文言が採られていなかったが、新版では他に倣って全文を採録するように改められた。

次に、「学習の手引き」には若干の変更が認められた。東京書籍では、「読み取る」の①②は全く同一であるが、「考えを深める」は④が「③武士の価値観や生き方とは、どのようなものだったのだろうか。「那須与一」「弓流し」から読み取り、考えたことをまとめよう。」と改められた。「価値観」が加えられている。光村図書では、「①は全く同一であるが、②は「② 扇の的を射るために、海に馬を乗り入れた「那須与一」の気持ちが表示されている部分を原文から抜き出そう。」がカットされている。③は「扇の的」に登場する人物たちの行動や心情から、どのようなもの見方や考え方を読み取っただろうか。それに対する自分の考えを述べてみよう。」の如くに、かなり簡略な表現

に変わった。「次へつなげよう」は「学習を振り返る」に変わり、「古典の文章の調子やリズムについて、どんなことを感じたか。・登場人物の行動や心情から、どのようなもの見方や考え方を読み取ったか。」に改められた。なお、東京書籍・光村図書ともに、朗読は音読には改められず、朗読のままであった。
「扇の的」を採録する二つの教科書における「学習の手引き」に関しては、「若干の変更」と言うよりも、より簡素化したに過ぎないという印象である。鳴り物入りであった今回の教科書改訂の目的は、いったい何であったのか。小手先の改訂でお茶を濁していると思われない。
(同年八月三二日改稿)

『平家物語』扇の的 —高野本(覚一本)・延慶本対照表—

語り本系・高野本(覚一本)	筋立て	読み本系・延慶本	筋立て
<p>《那須与一》</p> <p>さる程に、阿波、讃岐に平家をそむいて源氏を待ちける物ども、あそここの峯、この洞より十四五騎、二十騎、うちつれうちつれまいりければ、判官ほどなく三百餘騎にぞなりにける。「けふは日くれぬ。勝負を決すべからず」とて、引退く處に、</p> <p>おきの方より尋常にかざ(一)たる少舟一艘、みぎはへむいてこぎよせけり。磯へ七八段ばかりになりしかば、舟をよこさまになす。「あれはいかに」とみる程に、舟のうちよりよはひ十八九ばかりなる女房の、まことにゆうにうつくしきが、柳のいつつぎぬにくれなるのかまきて、みな紅の扇の日いだしたるを、舟のせがいはさ</p>	<p>筋立て</p> <p>④阿波、讃岐で平家に背いて源氏を待っていた者どもが続々と集まってきたので、判官・義経の勢力は三百餘騎までになった。日暮となり、両軍が退却していると、</p> <p>⑤沖の方から渚に向かって小舟が一艘、磯まで70〜80m程で横向きになった。「あれは何だ」と見ているうちに、中から十八九歳程の美しい女房が出てきて、紅に日の丸の扇を船柵に挟んで、陸に向かって手招きした。</p>	<p>《余一助高扇射事》</p> <p>平家ノ方ヨリ船一艘進ミ来ル。浦船カト見ルホドニ、兵一人モ不乗ケリ。渚近ク押寄テ一丁余ニユラレタリ。暫ク有テ、船中ヨリ齡廿計モヤ有ラントオボシテ、女房ノ柳裏ニ紅ノ袴キタルガ、皆紅ノ扇ノ月出シタルヲハサミテ、船ノ軸ニ立テ、是ヲ射ヨトオボシクテ、源氏ノ方ヲ招テ、持タル扇ニ指ヲサシテ、扇ヲセガヒニ立テ入ニケリ。</p>	<p>筋立て</p> <p>(この部分なし)</p> <p>⑥平家方より(二人の兵も乗っていない)船が一艘、渚から100m程のところを波に揺られていく。しばらくして中から二十歳程の女房が出てきて、紅に月を描いた扇を指さして、これを射よとばかりに源氏方を手招きし、その扇を船柵に立てて船内に戻った。</p>

ミたて、陸へむひてぞまねひたる。判官、後藤兵衛実基をめして、「あれハいかに」との給へば、「ぬよとにこそ候めれ。たゞし大將軍、矢おもてにす、むて傾城を御らんぜば、手だれにねらうてゐおとせとのほかり事とおほえ候。さも候へ、扇をばみさせらるべうや候らん」と申。

「ゐつべき仁ハみかたに誰かある」との給へば、「上手ともいくらも候なかに、下野国の住人、那須太郎資高が子に与一宗高こそ小兵で候へども手き、で候へ。」「証掎ハいかに」との給へば、「かけ鳥などをあらがうて、三に二は必ずゐおとす物で候。」「さらばめせ」とてめされたり。

与一其比は甘ばかりのおのこ也。かちに、あか地の錦をもておほくび、はた袖いろえたる直垂に、萌黄をどしの鎧きて、足じろの太刀をはき、きりふの矢の、其日のいくさにゐて少々この(つ)たりけるを、かしらだかにおひなし、うすきりふに鷹の羽はぎませたるぬた目のかぶらをぞさしそへたる。しげどの弓脇にはさみ、甲をばぬぎたかひもかけ、判官の前に畏る。

「いかに宗高、あの扇のま(ん)なかるて、平家に見物せさせよかし」。与一畏て申けるハ、「ゐおほせ候はむ事、不定に候。ゐ損じ候なば、ながきみかたの御きずにて候べし。一定つかまつらんずる仁に仰付らるべうや候らん」と申。判官大にいか(つ)

③「あれはどういうことだ」と義経が聞くと、後藤実基が「射よということですが、大將軍が矢面に進んで傾城をご覧になっている時に、手練れの者に狙わせようという謀だと思われます。そうは言っても、扇を射させなくてはならないでしょう」といふ。

④義経が「誰か適当な人物はいるか」と聞くと、後藤は「小兵だけれども手利きです」として、那須与一を推薦した。重ねて「証掎は」と義経が聞くと、後藤は「翔鳥では三のうち二は必ず落とします」と答え、与一を召すことになった。

⑤与一は二十歳ほどの男で、萌黄威の鎧を着て、足白の太刀を差し、切斑の矢の残りを負い、ぬた目の鎧矢を差し添えていた。滋藤の弓を脇に挟んで判官の御前に畏まった。

⑥「あの扇の真ん中を射てみる」と義経から言われた与一は、「射おおせるかどうかは不定です。もし射損じたら御方のキズになります。絶対に射ることが出来る人に仰せつけた方がよいでしょう」と言うと、義経は怒って、「義経の命令に背くな。それ

源氏ノ軍兵是ヲミテ、「誰ヲ以カイサスベキ」ト評定有ケルニ、後藤兵衛実基ガ申ケルハ、「此勢ノ中ニハ、少シ小兵ニテコソ候ヘドモ、下野国住人那須太郎資高ガ子息那須余一資高コソ候ラメ。ソレコソ係取ヲ三度ニ二射テ取者ニテ候ヘ」ト申ケレバ、「サラバ召セ」トテ、余一ヲ召ス。

判官「アノ扇仕レ」ト宣ケレバ、資高辞ルニ不及、「承候ヌ」トテ、渚ノ方ヘゾ歩セケル。余一ハ褐衣ノ鎧直垂ニ、紫スソゴノ鎧ニ、大切文フノ矢ニ二所藤ノ弓持テ、黒鶴毛ナル馬ニ白覆輪ノ鞍置テゾ乗タリケル。海ノ面一段計歩出シテ、馬ノムナガヒ

(この部分なし)

⑦源氏方では「誰にいさせようか」と評定があったが、後藤実基が「少し小兵だけれども、那須余一がいます。翔鳥を三に二は取る者です」と言うので、「それでは召せ」ということになった。

(この部分なし)

⑧「あの扇を射ろ」と義経が言うので、余一は拒むことができず「承知しました」と言って渚に歩み寄った。余一は紫裾濃の鎧を着て、切斑の矢に二所藤の弓を持って、黒鶴毛の馬に白覆輪の鞍を置いて乗っていた。海に10m程、馬の胸懸がつく程まで歩

て、「鎌倉をた(つ)て西国へおもむかん殿腹は、義経が命をそむくべからず。すこしも子細を存せん人は、とうく是よりかへらるべし」とぞの給ひける。与一かさねて辞せばあしかりなるとや思けん、「はづれんハしり候はず、御定で候へば、つかま(つ)てこそ見候はめ」とて、御まへを罷立、黒き馬のふとうたくましるに、小ぶさの鞆かけ、まろはやす(つ)たる鞍おいてぞの(つ)たりける。弓とりなをし、手綱かいくり、みぎはへむひであゆませければ、みかたの兵共うしろをはるかに見をく(つ)て、「このわかもの一定つかまつり候ぬと覚候」と申ければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ころすこしとをかりければ、海へ一段ばかりうちいれたれども、猶扇のあハひ七段ばかりハあるらむとこそ見えたりけれ。

がわからない者はさつきと帰ってしまえ」と言うので、これ以上は拒めないと覚悟した与一は、「外れるかどうかはわかりませうが、ご命令なのでやってみましょう」ということで、小房の付いた鞆をかけ、まろばや模様の鞍を置いた遅い黒馬に乗り、手綱を取って渚に歩ませると、御方の兵ともが「この若者ならきつと射るでしょう」と言うので、義経も頼もしげに見た。矢ころが少し遠いので、海へ10m程入ったが、まだ扇までは70m程あるように見えた。

ツクシマデ打ビデ、中七段計ニテ馬ヒカヘテ見レバ、

比ハ二月ノ中ノ十日ノ事ナレバ、余寒猶ハゲシキ上、ケサヨリ北風吹アレテ、海上静ナラズ。波ハイトゞ立マサル、船ハ浮又沈又漂ヘバ、立タル扇ヒラメイテ、座ニモタマラスクルメキケリ。イツクヲ何ニ射ベシトモ、射ツボ更ニ覚ヘネバ、

み入ったが、まだ扇までは70m程の距離があった。(そこで)馬を控えて見ると、

①比は二月の十日のことだったので、寒さが激しい上に、朝から北風が吹き荒れて、波が大変高かった。立てた扇の的はひらひらとひらめいて、どこを射たらよいか、ツボが全くわからなかった。

②余一は目をふさいで心を静め、自分を守ってくれるように、もし射損することがあれば、腹掻き切つて海に入り、毒龍の眷属になると神々に祈念した。すると、風が少し静かになって、扇もまた座席に静まっ

①頃は二月十八日の西の刻程で、北風が激しく、波が高かった。的となる扇は、その影響で揺れ動いていた。沖では船で平家方が見物し、陸では馬上で源氏方が見物していた。晴れがましいことだった。

②与一は目をふさいで、真ん中に射ることができるよう、「この矢を外させたもつな」と神頼みをした。すると、風も少し弱まって、扇も射やすくなったようだった。

与一、目をふさいで、「南無八幡大菩薩、我國の神明、日光権現、宇都宮、那須のゆせん大明神、願くハあの扇のま(ん)なかみさせてたばせ給へ。これを見るぞんずる物ならば、弓きりおり自害して、人に二たび

面をむかふべからず。いま一度本国へむかへんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふな」と、心のうちに祈念して、目を見ひらひたれば、風もすこし吹よりはり、扇もぬよげにぞな(つ)たりける。

与一、鎗をと(つ)てつがひ、よ(つ)ひいてひやうどはなつ。小兵といふちやう、十二束三ふせ、弓はつよし、浦ひびくほどながなりして、あやまたず扇のかなめきハ一寸ばかりをいて、ひふつとぞあき(つ)たる。鎗は海へ入ければ、扇は空へぞあがりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に、一も三もみもまれて、海へさ(つ)とぞち(つ)たりける。

夕日のか、やいたるに、みな紅の扇の目いだしたるが、しら浪のうへにたよひ、うきぬしづみぬゆられければ、奥にハ平家、ふなばたをた、いて感じたり。陸にハ源氏、

(この部分なし)

④与一が鎗矢を取って射ると、小兵とは言っても弓は強いので、矢は長鳴りして、扇の要の一寸ほどのところを射切った。鎗矢は海に入り、扇は空に舞い上がって、虚空にひらめいた後、春風にもまれながら海に散った。

⑤夕日の中、日の丸を描いた皆紅の扇が、白波の上で揺られているのを見て、平家方は沖で舟端をたたいて感じ入り、源氏方は陸で旗をたたいてどよめいた。

本国へ不可返ル。腹カイキリテ此海ニ入テ、毒籠ノ眷属ト成ベシ」ト祈念シテ、目ヲ見アゲテ見ケレバ、風少シ静テ、扇座席ニ静リタリ。

此ニ余一心少シイサバシクシテ、心ノ中ニ案ジケルハ、「サスガニ物ノ射ニク(キ)ハ。夏山ノ峯、緑ノ木ノ間ヨリ、ホノカニ見ユル小鳥ヲ殺サデ射ルコソ大事ナレ。是ハ波ノ上ノ扇ナレバヤスカルベシトモ、息ノ船ニハ主上建礼門院ヲ始奉テ、二位殿、北政所、月卿雲客、屋形ヲ並ベテ、日ヲスマシテ是ヲミル。汀ノ源氏ハ九郎大夫判官ヲ初トシテ、東国北国ノ大名小名、小馬ヲ静メ、肩ヲ並テ見物ス。彼ヲ見、此ヲ案ズルニ、何モ暗ナラズト云事ナシ。サレバ怯猿ノ芸ヲ施シケル養由、飛雁ノ声ヲ射ケル更嬴モ、胸シヌベク」ゾオボヘケル。

余一鎗取テハゲテ、十二束二伏ヲヨ(ツ)引テ、シバシカタメテ兵下射タリ。浦ヒマケト海ノ面ヲ遠鳴シテ、五六段ヲ射渡シ、扇ノ蚊目ハタトイテ、二ニサトゾサケニケル。一ハ海ニ入テ波ニユラル。一ハ一丈許空へ上ル。折節風吹テ地ニモヲトサズ、ソラニ吹上テ舞遊ブ。

平家ノ方ニハ是ヲ見テ、船バタヲ叩キ船屋形ヲ叩キ感ケリ。源氏ノ方ニハ前ツ輪ヲ叩キ、エビヲ叩テド、メキケリ。夕日ニカ、ヤキテ波ノ上ニ落ケレバ、秋ノ風ニ龍田川

た。

③余一は勇気を奮い起こして思った。「さすがに射にくそうだ。夏山の木の間からかすかに見える小鳥を、殺さないで射ることは難事だ。こちらは浪の上の扇だからたやすいことだが、沖の船には主上や建礼門院を始め、二位殿等々の高貴な方々が固唾を飲んで見ている。一方の汀の源氏は、九郎判官を始めとして東国北国の武士たちが肩を並べて見物している。何れも暗れがましいことだ。きっと弓の名人の養由や更嬴も、胸が潰れそうだったはずだ」と思った。

④余一が鎗矢を取って射ると、矢は海の上を遠鳴りして50〜60m程射渡し、扇の要を射貫いて二つに裂けた。一つは海上で波に揺られ、一つは一丈ほど空中に飛んで、ひらひらと舞い遊んだ。

⑤平家方ではこれを見て、舟端や船屋形を叩いて感じ入り、源氏方では前輪や旗を叩いてどよめいた。扇は夕日に輝いて波の上に落ちたので、秋の風で龍田川に紅葉が散

<p>ゑびらをた、いてどよめきけり。</p> <p>《弓流》</p> <p>あまりの面白さに、感にたへざるにやとおぼしくて、舟のうちよりと五十ばかりなる男の、黒革おどしの鎧きて、白柄の長刀も(つ)たるが、扇たてたりける處にた(つ)てまひしめたり。</p> <p>伊勢三郎義盛、与一がうしろへあゆませよ(つ)て、「御定ぞ、つかまつれ」といひければ、</p> <p>今度はなかざしと(つ)てうちくはせ、よ(つ)ひいてしや(つ)くびの骨をひやうふつとゐて、ふなぞこへさかさまにゐたをす。平家のかたにハ音もせず、源氏の方にハ、又ゑびらをた、いてどよめきけり。「あ、ゐたり」といふ人もあり、又「なさけなし」といふものもあり。</p>	<p>⑥感に堪えられなくなった五十ばかりの武士が船の中から現れ、黒革威の鎧を着、白柄の長刀を持って、扇を立ててあつたところで舞った。</p> <p>⑦すると、伊勢三郎義盛が与一の後に歩み寄って、「命令だ、やれ(あれを射よ)」と言うので、</p> <p>⑧今度は中指の矢を取って、引き絞って首の骨を射ると、武士は船底へ逆さまに射倒された。平家方では音もせず、源氏方では扇をたたいてどよめいたが、「よく射た」と言う人もあれば、「情けがない」と言う人もいた。</p>	<p>二紅葉ノチリシクカトゾ覚ヘケル。敵モ御方モ是ヲ見テ、一同ニアトゾ云合ケル。</p> <p>《余一助高扇射事》のつづき</p> <p>余リ感ニ絶「ザ(ル)ニヤ、平家ノ船ノ中ヨリ、年五十余リナル武者ノ、黒革威ノ鎧キテ大擲刀持タルガ、扇立ツルセガヒノ上ニテ舞ケリ。</p> <p>源氏ノ方ヨリ是ヲミテ、「アレヲ射ヨ」と云ケルニ、或又「若射ハツイツル物ナラバ、先ニ扇ヲ射タリツル事モ気味有マジ。ナイソ」ト云者モアリ。「只トク射ヨ」ト云者モアリ。余一「射」ト云時ニハ矢ヲサシハゲ、「ナ射ソ」ト云ヨリハ矢ヲサシハツシケルホドニ、「ナイソ」ト云者ハ少ク、「只射ヨ」ト云者ハ多リケレバ、</p> <p>余一今度ハ中指ヲ取テ番テ、又ヨ(ツ)引テ射タリケレバ、舞ケル武者ノ内甲ヲ後ヘツト射出タリケレバ、男ハシバシモタマラズ、マ(ツ)逆ニ海ヘガプト入ニケル。其度ハ船中ハニガリ、ヲトモセズ。源氏ノ方ニハ「アイタリ」ト云者モアリ、又「無情射タリ」ト云者モアリ。</p>	<p>り敷いたようになって、敵も味方も「あつ」と言い合った。</p> <p>⑥感に堪えられなくなったのか、平家の舟から五十余りの武士で、黒革威の鎧を着て大長刀を持った者が、扇を立てた船楯の上で舞った。</p> <p>⑦すると、源氏方からこれを見て、「あれを射よ」と言ったのだが、「もし射外したら、先ほど扇を射たことも意味がなくなってしまう。射るな」という者もいたし、「早く射よ」という者もいた。余一は「射よ」と言う時は矢をつがえ、「射るな」と言う時は矢を外していたが、だんだん「射るな」という者は少なくなり、「射よ」という者が多くなってきたので、</p> <p>⑧今度は中指の矢を取って番えて引き絞って射ると、舞っていた武士の内甲を後方に射出したので、男はたまたまに真つ逆さまに海へ落ちた。(平家方の)船中では苦り切つて音もせず、源氏方では「あ、射たぞ、射たぞ」という者もいて、「情け無く射たものだ」という者もいた。</p>
---	--	---	--